

2020 年度活動報告

2020 年はアーカイブとライブ性について再考する時間をもたらしたことが、本プロジェクトを立ち上げた経緯につながっている。プロジェクトの概要について述べる前に、簡単に振り返っておきたい。

2016 年から 2019 年までに、石谷は AIDS 危機の時代の芸術実践についてのアーカイブに携わってきた。さまざまな過去の映像・写真資料のデジタル化、開催されるイベントの写真・映像記録などを行うなかで、森美術館や京都精華大学の展覧会での関連イベントでの映像や字幕の作成なども手伝いながら、アーカイブの作業や資料展示の実践を進めてきた。多くの当事者にとって集中して取り組むべき課題は、過去の出来事の整理よりも、現在の活動にある。ライブイベントにとって、映像記録をパッケージ化する目的がなければ、記録やアーカイブは副次的なものに過ぎず、照明のあたる舞台の傍らで偶発的になされる残余に過ぎない。パフォーマーの動きに観者が反応し、それに応えてパフォーマーはフィードバックの渦をいっそう激しくかき混ぜていく。そうしたフィードバックの渦がライブイベントの一回限りの体験を生み出してきたと言えるが、すでにソーシャルメディアの浸透は、そのフィードバックを身体言語から切り離し、写真や映像のシェア、テキストやソーシャルボタンに置き換えはじめていた。

新型コロナウイルスによる感染予防としてのソーシャルディスタンスは、その置き換えを強化したに過ぎないと言える。近接や接触による身体言語、ひとつの場所をシェアすることで生み出される安心感は掘り崩され、個人を小部屋に分断し、監視のテクノロジーを通して規律訓練するという近代以来の独房化のプロジェクトの完遂であり（公衆衛生は社会的安全を確立する近代のテクノロジーとともに発展してきた）、孤立と分離のスペクタクルの徹底であり、これこそソーシャルディスタンスとウェブ・ミーティングが、かつての日常を置き換えて、常態化した非常事態として私たちが直面している日常である。管理社会や監視資本主義の強化というネガティブな展望があるとはいえ、他方で、慣習的な業務形態の見直しや通勤時間の短縮は、私的な生活環境に注意を向け直すポジティブな余白をも生み出したかもしれない。

感染予防の観点から飲食店の夜間営業が制限されただけでなく、制限の対象が、劇場やライブハウスやダンスクラブなどにもおよんだのは、ライブイベントを生業としている人々にとっては大きな試練になった。ライブ配信は、その緊急の代替として行われるようになった。

クラブメトロで毎月第 4 金曜日に行われているドラッグクイーン・パーティーDiamonds Are Forever が、5 月 29 日に予定されていたパーティーを初のライブ配信で行うことに決めた際に、上記のアーカイブ・プロジェクトでの経緯から、映像面での簡単な助力をすることになった。密を軽減するために現場に参加できないクイーンが自室で撮影したパフォーマンスの映像を編集し、そのブルーバックの背景を舞台の映像と合成する、パフォーマーの登場にあわせて名前を画面に表示させる、といった簡単な作業である。必要に迫られてとはいえ、ライブパフォーマンスに合わせてリアルタイムに複数のカメラ映像やフッテージを切り替えて配信するためのノウハウは身近になり、ライブ・スイッチャーの安価な機材（ATEM Mini など）やオープンソースのストリーミング・ソフトウェア（OBSSstudio）を使うための Tips が流通しはじめていた。クラブメトロでも、運営するスタッフらによって手探りで配信のための方法が模索されていた。現場でパフォーマーのために DJ が流す音と、ストリーミングで配信される音のボリュームは細心の注意を払いながら調整される。楽曲のイントロや

リズムに合わせて、用意していた映像素材を再生する。複数のカメラで撮影された映像や素材はスイッチャーを使って切り替えられたり合成されたりしてひとつの配信番組が出来上がる。配信中パフォーマーやスタッフたちは緊張感をもってそれぞれの役割を粛々とこなすが、3時間の配信を終えた後の充実感は、5月半ばまでの一月の外出自粛期間中に何が失われたかということを実感させられた。それは、共同作業の現場で生まれる相互的な信頼だろう。その後も数回のクラブイベントを手伝うことになり、その都度のイベントでは異なる工夫がこなされた。言及したい事柄はいろいろあるが、ここではとりわけ7月12日にメトロから配信された故・古橋悌二生誕祭“LOVERS 60” Teiji Lovers Birthday Bash について述べておきたい。

本イベントは2020年で第5回目をむかえたが、今回は観客人数制限のうえでのオンライン配信を、音楽面で古橋氏とコラボレーターだった山中透氏を中心に、パフォーマーの砂山典子氏、ブブ・ド・ラ・マドレーヌ氏らとともに行うことになった。私はアーカイブからの編集素材の送り出しを担当した。映像はパフォーマーの背後のスクリーンに映され、その様子を撮影した映像が配信される。プログラムと音楽の流れのアイデアは山中氏によって生まれ、The OK GIRLSの新作映像のほか、これまで公開されたことのないダムタイプ海外公演時の記録映像に、山中氏の解説と二人が共作した音楽が加えられた。ダンスタイム時には、DJ南琢也氏の選曲にあわせて過去のクラブイベントのフッテージが組み合わされる。最後は山中透氏によるミニコンサートで締めくくられた。スクリーンに投影される過去のダンスフロアのイメージにイベント時に訪れた観客が踊る映像が重ねられ、そこに古橋悌二／ミス・グロリアスの姿が現われる。また、公演のバックヤードを記録した映像は古橋悌二氏が手持ちで撮影した長回しの映像である。それによって、その視野と身体性が亡霊のように立ち上がってくるように感じられた。過去のアーカイブ映像や資料が、現在進行形の状況のなかでプレゼンテーションされるとき、複数の視点や時間が、現在の時間に折り重ねられ合成される。ドラッグクイーンは過去に歌われた音源にあわせて、口パクでその身体性を同期させることによって、現在の時間のなかに生き生きとした情動のイリュージョンを創り出す。アーカイブ資料の展示が、鑑賞者の非同期的な想起を通じた論争の空間や批評的思考を育むのに対して、ライブ配信は、アーカイブ資料のいわばリップシンクの可能性を示しているように思える。投影した映像は主に1990年前後に撮影された一時期の映像素材が中心となったが、事前準備のために映像素材を編集する必要があった。大容量のデータのシェアとプレビュー確認のためにNASを使ったクラウドストレージが活躍したのだが、一連の共同作業のためのデータサーバーから素材の編集、そして配信までのワークフローを効率化するための仕組みの構築も重要である。

本プロジェクトはそうした実践を通してライブハウスから芸術資源研究センターへと、ストリーミング配信のノウハウを移植することを通して、写真や動画などのアーカイブ映像をライブ性を持ったかたちで配信することによる、新たなアーカイブ活用の可能性を模索するものである。「実験室」と名付けているのは芸資研のカフェスペースも含めたオフィスを配信スタジオも含む新たな実験の場として再構想することも含まれているからだ。9月からコロナ禍での遠隔メディアの活用を芸資研での研究活動に活かす方策が模索された。配信には特に専門的な技能はいらない。数人のチームがあれば気軽に複数のカメラとコンピュータからのHDMI入力を切り替え合成して配信することのできる環境として芸資研を利用できる。2020年度のアーカイブ研究会は、従来の研究会を、ライブ配信とオンデマンドの記録映像で発信する端緒となった。これまでも研究会の記録映像のマルチカメラ編集を行ってきたが、今後はリアルタイムで編集された映像を記録できる。

他方で、学内特別研究助成で進められている、2023年の移転までに沓掛キャンパスの写真データベースを参加とシェアを通して積み上げていくというプロジェクトにおいて、その実践を動画配信プラットフォームYouTubeで配信する作業も進めている。アーカイブ作成のプロセスを、ゲスト参加のビデオログとして定期

的に発信することで、遠隔での参加も含めたアーカイブの方法を模索することが、本プロジェクトの目的となる。失敗もともなう具体的な実践を通して、その新たな可能性を模索したい。

石谷治寛（芸術資源研究センター非常勤研究員）